

## 海外旅行報告

2年ぶりのアラビア  
ヨルダン・ハシエミテ王国往還記

牛木久雄（会員）

この数年、毎年ヨルダンに出かけていたが、このところの東・北アフリカ危機で、昨年は機会がなかった。幸い今年は、ヨルダンの治安の良さが知られ始めたせいも、2年ぶりに渡航が実現し、1か月ほど滞在することができた。

国際善隣協会ではアラビアに関する話題が少ないが、久し振りのアラビア旅行で印象に残った見聞をお伝えしたい。

アラビアへ行くには、ドバイからというのがすでに定番となっているようだが、私もドバイ行きのエミレーツ航空で成田を飛び立った。搭乗機はボーイング777という400人は乗れる大型機だったが、8月中旬の灼熱の時期のアラビア行きだというのに満席だった。夜中にドバ



写真1：ドバイ中心部。中央にハリーファ・タワーが見える



写真2：沙漠の農場。緑の円盤は地下水灌漑

イに着いて、早朝のヨルダン便に乗り換えた。ヨルダン便ボーイング777だったが、幸い満席ではなく、

アンマンまでの3時間を右窓、左窓と動き回って、大いに下界見物ができた。まず、写真1をご覧いただきたい。これが離陸直後に目に飛び込んできたドバイ中心街である。中央の尖塔が、高さ800mのハリーファ・タワーである。注目すべきは、タワーを取り巻く幾つかの大きな人工湖沼である。さらに海岸には、無数の人

工島が建設され不動産景気が依然として続いている。沙漠の価値を建設投資によって生み出すとしている。飛行が半分ほど進んだところで、眼下の沙漠に数え切れないほどの緑の円盤が見えてきた。写真2の円盤1個には、円盤の中心を軸とする、長い散水パイプのアームが取り付けられ、定期的にアームが回転移動して灌漑する。灌漑水源は地下1000mほどに蓄えられた地下水であるが、もちろんその起源は現在の雨ではない。3万年前の前の多雨期の雨が、浸透して溜まったものだが、半世紀ほど前にサウジアラビアで発見され、前世紀末



写真3：死海の湖岸。湖面低下は40mにも及んでいる



写真4：死海湖岸の陥没。湖面低下とともに湖岸の陥没が起こっている

に大々的な利用が開始された。その中心は小麦の栽培だったため、サウジアラビアは小麦の輸出国になった。当初、百年は持つとされていた地下水であるが、今回上空から見ると、放棄された円盤や、縮小された円盤などが認められた。水源の枯渇が予想以上に速いためだろう。次の

地下水涵養期まで、数万年は待たねばならないのだから、もったいないことをするものである。これまで、100年続いた石油景気で、アラビア半島は前代未聞の開発現場となった。各地に巨大な都市が出現し、高速道路が流砂地帯を貫いた。もはや、テント暮らしの遊牧民など全滅

に近いほどだ。人間生活を支える水資源の6割が、すでに脱塩海水や、地下水(化石地下水ともいう)になった国もある。目的地のヨルダンでは、各地の地形や地質を見て回ったが、ヨルダンとパレスチナ・イスラエルを分けるヨルダン・死海地溝帯が、今回の主要調査対象地

であった。この地溝帯の最低部は死海で、現在の湖面標高は海抜マイナス420mである。私が昔泳いだ時は、まだマイナス380mだった。それから40年余、死海は毎年1mずつ湖面が下がった。写真3のように、かつての海岸は湖岸の遥か上になっ

てしまい、道路は崖腹を走り、遊泳客は無粋な崖下りをしなければならなくなった。死海の湖面を支えているのはヨルダン河の水である。しかし、上流部での水争奪の結果、流量は以前の3分の1となり、現在も湖面は下がり続けている。

湖面が下がったために、湖岸に異変が起っている。湖岸に地盤沈下や陥没が多発しているのだ。中には、写真4のように、農地で崩壊が発生している。多額の資金と入植者を投入した開拓農地で、異変は20年ほど前に始まり、現在では各地に恐ろしい傷跡を残すほどになった。

以上、激変するアラビアの印象を、幾つか紹介した。